
marchen 【Sound **H o r i z o n**より】

鈴村弥生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Marchen【Sound Horizonより】

【コード】

N6069X

【作者名】

鈴村弥生

【あらすじ】

Sound Horizonのアルバム【Marchen】を全部小説にしてみようという無謀な企画です。他の方の解釈などは一切参考にしていないので、私の独自のアイデアによるストーリー展開となります。ご自身の解釈を壊されたくない方は、見ない方がいいと思います。

第一章 第一節 メルツ・フォン・ルードヴィンゲ(1) (前書き)

> i 3 3 1 1 4 | 2 6 9 4 <

第一章 第一節 メルツ・フォン・ルードヴィング(1)

この物語は虚構である。
ただし、そのすべてが虚偽であるとは限らない。

第一章

第一節 メルツ・フォン・ルードヴィング

物心ついたときには、すでに父という存在はいなかった。父とい
うのがどのようなものなのか、それすら彼は知らない。

彼にわかっていたのは、自身の名前がメルツ・フォン・ルードウ
ィングであること、そして彼を守ってくれるのが優しい母親だけ
あることだった。

「メル」

呼ばれて、少年はゆっくりと顔を巡らせた。気をつけていないと、
目の前の世界は簡単にぼんやりと輪郭を失ってしまう。

「大丈夫？ また頭が痛くなったの？」

そんな彼の小さなためらいと戸惑いを、母は正しく見抜いてくる。
「いえ、大丈夫です」

首を振ってメルは改めて目を凝らし、美しい母の凛と整った面差
しを明確にしようと試みた。

まず印象的なのは、長い栗色の髪だ。結わずにまっすぐ背に流し、
いつも青い薔薇のついたヴェールをかぶっている。

メルは母以外の女性を知らないが、母以上に綺麗な人が果たして
存在するのかというも思う。

「母上」

お母さん（ムツティ）、と呼びそうになり、あわてて言い直す。
もう小さな子供ではないのだと、メルなりのけじめだ。

けれどそんなことは何もかもお見通しと言わんばかりの母の優しい笑みを目の当たりにしてしまうと、そんな決めごとをした自分がまた恥ずかしくなってしまう。

「まだ見ることに慣れていないのね」

母の手が、そっとメルの白い髪を撫でる。なめらかな感触は瞼の上ですべり、心地よさにメルはふっと微笑んだ。

「無理をはいけませんよ。少しずつ、目が見えるということを受け入れていけばいいのだから」

「はい」

ようやく焦点の安定した視界にまっすぐ母を収め、メルはうなずいた。

幼い頃のメルの世界は、優しく温かい漆黒だった。常に傍らにあり守ってくれるその温もりの名が『愛』だということを、ずっとのちになって知った。

目の見えなかったメルは、そもそも視力という概念自体理解できなかったのだ。

だからメルにとってはまだ、豹変した世界はすべて未知の光だ。

「これは……草」

伸ばした指先に、ひやりとした何かが触れメルは思わず手を引っ込める。月の光に柔らかく照らされて、人差し指の先が冷たく銀色を滑らせている。

「夜露……」

その名前を思い出し、彼はまじまじと滴を見つめた。

本で読んだ宝石というものは、このような美しい存在なのだろうか。自ら輝き、希有な魔力で人を、特に女を夢中にさせると聞く。

母は一つとして身につけていないけれど、やはり宝石を飾ればもっ

と美しく、もつと素晴らしくなるのだろうか。

しかし、夢想に浸る彼の目の前で、夜の輝きはつうと指を伝い暗がりに滴り墜ちてしまった。

落胆の溜息をつき、メルは立ち上がる。膝の辺りがしつとり冷たかったが、不快ではない。

月の光が、とても明るかった。

太陽が強すぎて耐えられなかった頃、銀の明かりの下でメルは様々なことを学んでいった。だから今でも、昼のまばゆさよりも静謐な夜のあえかさの方が慕わしい。

たとえば、天に負けないくらい美しい星をちりばめている夜の草原も、その一つだ。

あまり遠くへ行つてはいけない、と母にいつも注意されてはいるけれど、この光景を前にするとつい忘れてしまう。いつまでもどこまでも、清浄なきらめきを追いかけていきたくなる。

夜露の星を辿りながら、メルはゆっくりと歩いて行った。まだ月は天の高いところにある。もう少し散歩してからでも、戻るには遅くないだろう。

メルは、そうしてなおも光を散らして歩いた。夜露に塗れた苔藻は、彼の軽い足取りですらいとも儚く宝石を失っていく。それを、惜しいと思わないわけではなかったけれど。

第一章 第一節 メルツ・フォン・ルードヴィンゲ(2) (前書き)

> i 3 3 1 1 4 | 2 6 9 4 <

第一章 第一節 メルツ・フォン・ルードヴィング（2）

その建物を見つけたのは、月が真円を描いた夜のことだった。

夜露を追いかけて、この夜もメルは無心に森を彷徨っていた。あまり遠くへ行き帰りが遅くなれば母に心配をかけるかわかっていないわけではなかったが、満月の銀光をいっぱい照り返す夜の森は、いつまでも目に焼き付けていたいくらい美しかったのだ。

草に隠れる木の根に足を取られないよう気をつけながら、それでもだんだん進む足は速くなる。頬を上気させ、メルは夢中で月光の中を歩いていった。

深い深い森にも、境目はある。

メルはそうしているうちに、ぽっかりと木々が途切れたことに気づいてぎくりと動きを止めた。

森から出ることを母があまり快く思っていないらしいことを、メルは知っていた。メルが少しでも外に興味を示すそぶりをすると、彼女の目に悲しみと不安が浮かぶのだ。何が母を憂いさせるのかまでは考えが及ばなかったが、母にそんな顔をさせたくなくて、メルは自分の好奇心を極力隠してきた。

けれど、消し去れはしなかったのだ。

しばし辺りを見回したのち、メルはそろそろと再び歩き始めた。

頭上を木々が覆い隠すことのない道は、妙に広々としていて空虚とすら感じられる。

夜空というのは、こんなにも深い藍色をしていたのか。

星々というのは、こんなにも信じられないくらい数多ちりばめられているものなのか。

鼓動が早くなる。わくわくする気持ちに併せてたちまち全身を駆け巡るのを覚えて、メルは思わず微笑んでいた。

もっ少しだけ。

もっ少しだけ、この先へ行ってみたい。見てみたい。

「……ごめんなさい、母上」

口の中で小さく呟いてから、少年は走り出した。

月は明るい。そして、地面は草の一本も生えることなく、硬く乾いていた。これを『道』と呼ぶのだとメルは本で知った。

本物の『道』を見るのも、実際に踏みしめるのも初めてのことだ。纏わり付いてくる草のない地面は、妙に軽く思えた。

それがさらに、メルの足取りを速くさせる。

走って走って、干上がった喉に痛みを覚えてようやく彼は立ち止まった。苦しい。全身が、空気と休息を求めている。

最も主張の激しい心臓の要求に従って、彼は道の上にしゃがみ込んだ。

考えてみれば、これだけ全力で走ったことも今までなかった。そうしようにも、森の中では危険だからだ。

疲れた。でも、気持ちがいい。

しばらくじっと休んでいると、身体中の叫びも収まってきた。

大きく息を吐き出して、彼は空を見上げる。

月が、美しかった。あまりに美しく明るすぎて、星が見えない。

ふと、帰りを待ちわびているだろう母のことを思い出した。

きつと心配している。急に、自分の咄嗟の行動が後ろめたくなつた。

もう戻ろう。そして二度と、言いつけを破つたりしないようにしなければ。

立ち上がった少年は、そのときは確かに心に決めていたのだ。

「あ……！」

足から伝わる振動。だんだん近づいてくる轟音と、何かの存在。

道の脇に身を隠したのは、ただの反射だった。

重い音は、どんどん迫ってきた。息すら殺して、目だけをのぞかせてメルはそれが通り過ぎるのを待った。

月の光が、遮られる。それが、一瞬だけメルの前をよぎっていく。音も重さも振動も、その影と一緒に転がっていく。

ぴりりぴりりと、鋭い音が時折耳を貫いた。

本当にそれらが小さくなってしまうてから、メルはゆっくりと路上に戻る。

あれは、何だったのだろうか。

大きな黒い箱に、四つの車輪がついていた。

ぴりりぴりりというのは、箱の前に乗った何かが、細くてしなるものを振り回すときの音だった。一番先頭にいたのは、四つ足の生き物だろう。息づかいすら聞こえそうだった。

本で得た知識から、メルは懸命に今日にしたものの名を探る。

「馬車……」

それを初めて知ったのは、おとぎ話の中だ。

綺麗な綺麗な王女が乗る、綺麗な綺麗な乗り物。

溜息をついて、メルは馬車の消えていった先に目を凝らす。

その夜の月は本当に、明るかった。

本当に遠くにあつた細長い塔の、黒々と影に塗りつぶされた姿をはっきりと彼に教えてくれるほどに。

第一章 第一節 メルツ・フォン・ルードヴィンゲ(3) (前書き)

> i 3 3 1 1 4 | 2 6 9 4 <

第一章 第一節 メルツ・フォン・ルードヴィング(3)

「ありがとうございます」

包帯を巻いた腕を気遣うように抱えたままで、中年の女性が頭を下げていた。

本当は人前に出ることを母に止められているけれど、最近メルはこうして、こっそり物陰から母の仕事を見るようになっていた。母は『森の賢女』と呼ばれるほど薬草や病の治し方に詳しく、その知識と人柄を慕ってここを訪れる者が多い。

今まで、母以外の人になど興味はなかった。母の言いつけを破って見知らぬ人間を観察しなくても、メルの本棚には彼の興味を惹きつけて止まないたくさんの本があったし、母の気持ちを害しなくなかった。

あの月夜から、そんな気持ち少し変化している。物音を立てないよう部屋に戻り、メルは寝台に腰を下ろした。目を閉じると、今も鮮明に思い出せる。

彼の身体を押しつぶさんばかりに広がっていた夜空、そこに散らばる無数の宝石、硬く踏みしめた地面の感触。そして。

「あれは、何だったんだろう」

大地と空を震わせて、静寂を無残に引き裂いて駆けていった馬車の、目指す先にそびえていた黒い黒い塔。

空を望むあの建物には、どんなものが覆い隠されていたのだろう。知りたい、と思った。

出てはいけないうつと言いつけられていた、外の世界。その理由すら、メルは教えられていないのだ。

なぜ、森から出てはいけななのか。外には何があるのか。そもそも、自分と母はどうして、森の中でひっそりと暮らしているのか。

自分は何一つ、その答えを知らずにいる。知らないままで、知ら

ないことに疑問すら持たなかった。

扉の向こうから、話し声と物音が聞こえてくる。客が帰っていくらしい。

ぼそぼそとした、母と客の女とのやりとりは小さすぎて、何を話しているのかわからない。

仕事とはいえ、母は外からの人間と会い、会話をする。しかしメルは、母以外の人と接することもできない。

禁じられて、いるから。

きゅっと、メルは服の裾を強く掴んだ。

「メル？」

ノックとほぼ同時に、母が入ってくる。

「少し時間がかかってしまったわ。ごめんなさいね」
いつもの優しい、美しい微笑み。

髪を撫でてくれる、暖かな柔らかい手。

「さあ、お茶の時間にしましょう。支度を手伝って」
母は綺麗で、いい匂いがして、そして。

「はい、母上」

その手を取って、メルは立ち上がった。

母から与えられたもので、メルを損なうものは何一つなかった。
喜びや幸福ばかりを、この人は常にもたらしてくれた。

でも。

ぼんやりと茶器を並べながら、メルの心の中から一つの像が消えることはなかった。

あの、黒々とした影の塔。

少年の紅い瞳は、刹那決意を浮かべて、閉ざされる。

第一章 第一節 メルツ・フォン・ルードヴィンゲ(4) (前書き)

> i 3 3 1 1 4 | 2 6 9 4 <

第一章 第一節 メルツ・フォン・ルードヴィンゲ(4)

散歩に行くこと自体は、怪しまれはしない。気をつけるのよ、と言われるだけだ。

「あまり遅くならないようにね」

「はい、母上」

それでも、聡明な母には自分の企みを容易に看破されてしまいうで、メルはつい視線を逸らしてしまう。

「ねえ、メル」

だから呼び止められて、つい肩が震えた。

「……なんででしょうか」

「外の世界は、楽しい？」

続く母の言葉に、心を鷲づかみにされたかと思った。

美しい母は、不思議な笑みを浮かべて少年を見つめている。

「そうね。あなたももう、こんなに大きくなったのですものね」

「母上……？」

やはり、見抜かれていたのだろうか。

今日もまた、森を出ようとしていたことを。

鼓動が早くなる。首の後ろに、汗が浮かぶ。

「いつまでも夜の森ばかりしか知らないのでは、窮屈かもしれないわね」

叱られるだろうか。森の中で遊ぶことすら、禁じられるだろうか。

知らず知らず唇を引き結んでいたメルから、今度は母の方が視線を背けた。

「……引き留めてごめんなさいね」

そのままドレスの裾をさらさらと鳴らして、母は奥へ行こうとする。

「あまり、遅くなるのではありませんよ」

背の高いほっそりとした後ろ姿が、扉の向こうに消えていく。

メルは、長い長い溜息をついた。

母の様子がおかしかったのが気にならないではなかったが、やはり好奇心を抑えることはできなかった。

何日か前の記憶を辿り、夜の森を進んでいくうちに、うっそうと茂る木々の影はぼっかりと切れた。夜空の天蓋を見上げて、メルは歓声を上げる。

月の光が少し弱くなったせいなのか、前に見たときよりずっと星々がまばゆく見える。ちかちかと気まぐれに瞬きする夜の宝石を、このままずっと眺めていたいとも思った。

しかし、あまり時間がないのも事実だ。

時折星空に目をやりながら、メルは道を進んでいった。

そういえば、あの馬車はいつたいどこから来たのだろう。メルの背後は森だから、そちらでなかったのは確かだ。

注意して歩いているうち、その疑問は解ける。森を迂回するようにして、道は作られていたのだ。馬車はそこをぐるりと走り、森から道へ合流したメルの後ろから現れたように見えたに違いない。

どこから来たのか。本当にあの塔へ行ったのか、それはまだわからない。

そんなことを考えながら足を動かしているうちに、夜闇に大きな影が浮き彫りになる。

あの塔だ。

もっと遠いかもしれないと思っていたから、メルは安堵して微笑んだ。これならば、母を心配させることなく戻ることも難しくない。塔は、高い塀に囲まれていた。尖った柵がメルを威嚇するように天を指し、入り口は見当たらない。

メルは少し考えて、鉄柵によじ登った。

少年の身体が軽かったことが、幸いしたのだ。

程なく彼は、とげとげしい鉄の威嚇を乗り越えて、その向こうの

柔らかな草の上に飛び降りた。誰かが来る気配はない。そもそも、人が本当にいるのかも怪しい。静かすぎる。

森の中だつて、こんなに無音でいることはほとんどないものだ。辺りを見回しながら、メルは建物に近づいた。四角い窓の向こうは真つ暗で、やはり誰も住んでいないのではなかったのか。彼は訝しんだ。

あの馬車は、ここを目指したのではなかったのだろうか。そもそも、ここはいつたい何なのだろう。

建物の壁を辿り、やがて縁に至る。何気なくそこを曲がるうとして、彼ははつと頭上を見上げた。

橙色。

本当に微かで、見間違いかも思えないと思えるほどにあえかだつたけれど、彼はそこに目を凝らした。

窓があつた。小さなそこを見つめているうちに、また変化が起きる。

暖かな橙色が、ちらりとまたよぎつたのだ。

メルは、素早く周りを探した。壁は石でできていて、問題の窓は二階にあつた。

何かないだろうか。何か。

「あれだ」

壁を伝う、蛇のようにしなやかな鳶が目に入った。駆け寄って何度か引つ張つてみたが、かなり丈夫そうだ。もっと上まで伸びているのかもしれない。

メルは夢中で、鳶に捕まって壁を昇った。ほんの僅かなくぼみに手と足をかけ、身軽な少年の身体は無茶なことを実現させる。

やはりちらちらと明かりの動く窓の縁に、彼は足をかけた。花の鉢を置いたためなのか、狭い露台がついていたのが幸いした。

両足を乗せて、鳶に捕まって膝を移動させる。月の光が、後ろから差し込んでいた。

中が、見えた。

寝台と机と、そんなものしか置かれていない狭い部屋だった。中央には椅子が置かれていて、何かがそこにいる。

いや、『誰か』だ。

金色の髪を高い位置で結び上げて、小さな顔は真っ直ぐメルの方に向けられていた。零れんばかりに見開かれた瞳が青い色であること、纏ったドレスの白さがより可憐さを引き立てている。

ふっくらと下唇が震えているのは、悲鳴を上げかけているからか。今人を呼ばれたら大変なことになるのに、メルは動くことすらできずにいた。

目が見えるようになってから、いろいろなものを彼は脳裏に焼き付けてきた。

朝焼けの薔薇色、夕暮れのすみれ色、夜空の宝石、そして母の笑顔。

森の夜露。

けれどそのすべてが色あせてしまうほどに、彼は目の前の光景に魅了されていた。

窓の向こうの少女は、本当に美しく、綺麗だったのだ。

第一章 第一節 メルツ・フォン・ルードヴィンゲ(5) (前書き)

> i 3 3 1 1 4 | 2 6 9 4 <

第一章 第一節 メルツ・フォン・ルードヴィング（5）

朝食が進まないことを、母が気づいて不思議そうな視線を向けてきた。

メルは慌てて匙を取り上げたが、食欲よりも昨夜の光景が彼を支配している。

夜の中でもなお、明るく輝くようだった金色の髪。あどけない青い瞳は、昨日は驚きと怯えだけでいっぱいになっていた。

それを、惜しいと思った。

けれどそれよりもなによりも、あの子の彼がしなければならなかったのは、赤く小さな唇から悲鳴が迸る前に逃げ出すことだったのだ。

「メル、どうしたの？ お腹が痛いのか？」

やはり思うように食事のはかどらない彼に、とつとつ母は声をかけてきた。

これ以上一緒にいたら、きっと昨夜のことを感づかれてしまう。

メルは嘘が苦手だ。相手が母ならば、なおさらのこと。

「大丈夫です。もう勉強してきます」

「無理しなくてもいいのよ？ 具合が悪いなら……」

「ううん、そうじゃないんです。心配しないで」

半分以上残してしまった食事を、急ぎながらもきちんと洗い場で片付けてから、メルは逃げるようにして母の視線から離れた。

自分は、とても悪いことをしているのかもしれない。母に隠し事をするなんて、今までなかったことだ。

母の仕事をのぞいたり、森を黙って出てみたり、最近自分は、母に逆らってばかりだ。

何よりも。

外の人間に会ってはいけないと、言われていたのに。

メルはそっと目を閉じた。二つの青い宝石が、真っ先に浮かんで

くる。

同じくらい年の頃のようだった。白いドレスがよく似合っていて、かわいらしくて。

彼女は、どんな風に笑うのだろう。どんな声で、話すのだろう。

知りたい。

三度目の冒険は、今までよりずっとうまくいった。

母が見送りに来るのを待たずに家を出て、森を駆ける。月はどんなやせ細っていて、今夜はほとんど足下が見えない。何度も転びそうになった。

それでも何とか、見慣れた道に辿り着く。

息が切れて干上がった喉が痛かったが、メルは走るのをやめなかった。

あの少女に。

もう一目でもいい、あの少女に。

なぜこんな気持ちになるのかわからない。あの窓をのぞけば、今度こそ本当に少女を怖がらせて、捕まってしまうかもしれない。

でも。

それでもいいと、思う心がある。

塔の影は、夜に溶けている。月の光を失いかけて、暗闇の中では存在を主張できずにいる。

ひやりと冷たい石の壁と、しなやかにうねる鳶を頼りにして、メルは窓を目指した。

風が吹く。身体が傾きそうになる。腹の辺りが恐怖で凍ったが、それに負けて手を放すことはもつと致命的だ。

自分にそう言い聞かせて、歯を食いしばる。やがて辿り着いた窓辺に膝をついたとき、メルは安堵のあまり気を失うかと思った。

がくがくと震える自分自身を叱咤して、窓の向こうに目を凝らす。そこで初めて気がついて、メルは息を呑んだ。

暗い。あのときと違って、明かりがついていない。
何も見えない。

じわじわと、心がいやな色に染まって下へ下へと落ちていく。

あの少女は、いないのか。

怖がらせてしまったから、家人に言っただけで部屋を変えてもらったのかもしれない。そもそも、そういった可能性を真っ先に考えつかなければならなかったのだ。

もう、会えないのかもしれない。

降りなければ、帰らなければと頭のどこかは主張していたけれど、そんな力もなくなつてメルはぼんやりと透明の壁に遮られた闇の向こうを見つめ続けた。

かた、という小さな音を耳が捕らえたのは、そのときだ。

惚けていた心が、突然はつきりと震える。誰かいるのか。メルを待ち伏せて、捕まえようとしていたのか。

窓に押し当てた掌に、汗が滲んだ。

逃げなければ。けれど、こんな状態ではすぐには動けない。間に合わない。

焦る目の前が、不意に違う色に染め上げられる。

咄嗟に何が起きたのか理解できず、メルはぎゅっと目をつぶった。

この、色は。

何だ。

「あの……」

小さな小さな。

母よりもずっと高く、ずっと子供のよう。

耳に飛び込んできて奥底で揺れるそんな音が人の声だと、気づいたメルはゆっくりと瞼を上げた。

視界を満たしていた色と、その意味もようやく明らかになる。

「ごめんなさい……」

橙色。

小さな燭台を手にして、不安そうに佇む細い人影。

「あなたは、だあれ？」

前に見たときと同じように金の髪を結び上げて、少女は首をかしげていた。

白い頬の柔らかさ、唇の可憐さにメルは名乗ることも忘れて目を奪われた。

やはり、とても綺麗だ。

こんな声で、この娘は話すのか。

こみ上げてくる温かな気持ちをかみしめながら、メルは少女の瞳を覗き込む。

そこに今は恐怖も驚愕も浮かんでいないことを認め、彼はゆっくりと微笑んだ。

第一章 第一節 メルツ・フォン・ルードヴィンゲ(6) (前書き)

> i 3 3 1 1 4 | 2 6 9 4 <

第一章 第一節 メルツ・フォン・ルードヴィング（6）

少女は、窓を開けてくれた。音を立てないよう気をつけて、メルはそっと部屋の中に降りる。

「……怖くなかったの？」

「え？」

問われ、メルは首をかしげた。

「こんなに、高いところに登ってきて」

「ああ」

普段森で木登りもよくしていたから、あまり抵抗はなかった。登るのに苦労したのは事実だが。

「平気だよ。もっと高い木に登ったこともあるよ」

「木に、登る？」

今度は、少女が不思議そうに瞬きした。あどけない様子が愛らしくて、メルはまた微笑んでしまう。

「木登り、したことないの？」

「ないわ」

メルは、つくづくと少女を眺めた。確かに、こんなに小さくて細い少女では、そんな遊びとは縁遠いかもしれない。それに着ているのがドレスでは、枝に裂かれてぼろぼろになってしまう。

「お外に出てはいけなくて、言われているから」

そんなことを考えていたメルは、続いた少女の言葉にはっと胸を突かれた。

「出てはいけないうって？ 誰に言われているの？」

「お母様」

鼓動が、飛び跳ねた。

「……どうして？」

森の外へ出てはいけない。
人に会っては、いけない。

「どうして、駄目なの？」

母の顔が、思い浮かんだ。

「わからない」

少女は、ふるふると首を横に振った。金の髪が闇に舞い、光を散らす。

「でも、出たら怒られるの。窓から外を見ることしかできないわ」
金の帳がさらさらと流れ、うつむいた少女の顔を隠してしまう。
メルはじっと、その様子を見つめていた。

いつまでも夜の森ばかりしか知らないのでは、窮屈かもしれないわね

微笑み。優しい手。温もり。

『母』というのは、そんな存在なのだと思っていた。

いつだってそばにいて、守り包んでくれるような、この世界で最高に善いものだと思っていた。

違うのだろうか。この少女にとっての『母』は。

第一章 第一節 メルツ・フォン・ルードヴィング（7）

「いけない」

はつとしたように、少女が唇を押さえた。どうしたのだろうと思
いながら見守るメルの前で、彼女は少し後ろに下がりドレスをつま
んでちょこんと会釈した。

「初めまして。ご挨拶が遅れました」

ただたどしい、いかにも丸暗記している言葉を必死に思い出して
いる口調だった。

「わたくし、ヴェッティン家のエリーザベトと申します。以後お見
知りおきを。若様」

懸命な様を健気と思いつつも、だからメルは、つい笑ってしまっ
たのだ。「

「……何で笑うの？」

あからさまに怒鳴ることはしなかったが、少女はむくれて頬を膨
らませる。メルは慌てて喉の奥におかしさの発作を引っ込めた。

「ごめんね」

決して、馬鹿にしたつもりではなかったのだ。

「一生懸命で、かわいかったから」

それが本当に、素直な気持ちだった。

「……かわいい？」

「うん」

うなずいて、彼はもう一度少女を視界のすべてに収めた。

小さくてほっそりして、彼の様子を窺うように瞬き一つせずじつ
と見返してくる青い瞳。無防備であどけなくて、手をさしのべたく
なる。

エリーザベトは、微かに笑みを見せた。機嫌は直してくれたらし
い。

「それで、あなたは？」

「え？」

「まだお名前訊いてないわ」

指摘されて、ようやくメルも思い至る。それでエリーザベトが自分から名乗ってくれたのかと、合点もいった。

母にも教えられた。誰かに名前を尋ねるなら、自分から名乗らなければいけないと。

その際の作法も、身につけさせられた。

「お初にお目にかかります」

片足を後ろに引いて、片手を胸に当てて、一礼する。

「メルヒエン・フォン・ルドヴィングと申します。以後よしなに、
姫君」

そうして見上げた先のエリーザベトは。

小さく首をかしげて、はにかんでいて。

小鳥のようだ、とメルは思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6069x/>

marchen【Sound Horizonより】

2011年10月28日10時26分発行